成人向け
京都土産
ようこそしゃすう♥
GUNDAM BUILD FIGHTERS FANBOOK
Ad-Hoc

Gundam Build Fighters Fan Book

Ad-Hoc

小説ゲスト　和紗　P.5
ごんぶと　P.17

※この本に出てくる方言はフィクションです。
（京ことばイメージ）

◆　◆　◆　◆　◆

薄手のシャツ一枚で過ごすにはまだ早い。

そんなことを思わせる冷ややかな風が頬を撫で、知らず首を竦めた少年は窓を締め切っていないのか、と首を巡らせて見慣れない部屋を一瞥した。そう広くもない部屋には乱雑に物が置かれ、家具らしい家具は見当たらず、かといって何もないわけではない。オブラートに包んで雑多、平たく言えば汚い部屋を眺めた彼は一つ嘆息を零し、それでも一角綺麗に整えられた箇所へ視線を移す。

幾つかの模型を飾ったそこは、埃を嫌っているのか透明なケースに納められ整然と並べられた模型を蛍光灯の明かりに照らし出していた。立つのは億劫なのか四つん這いのまま近寄った彼は見上げるように首を上向け、ガラスケースの中へと視線を向ける。糸のようと形容するに相応しいその眼がゆっくりと片側開かれ、精査するかの如く鋭くなった、そんな刹那。

「そんなに見てもマオ君ほど上手になんか出来てないよ」

「さいですなぁ。せやけど、基本に忠実、説明書通りにきちんと組み立てて出来てます。悪くないんとちゃいます？」

隔たりのない1Kのアパートに死角などあってないようなものだ。少年が動こうものなら衣擦れが立ち、アパートの主たる青年の鼓膜を叩く。

凡そ歳の頃は二十後半と言ったところだろうか。目の下に隈を作り、疲弊した面持ちでいながら笑みを浮かべる青年と、未だ義務教育すら終了していない少年の関係を端的に語るのであれば、彼らが目にしている模型がそれだ。

「第五ブロックの覇者に誉めて貰えるなんて光栄極まりないとでも言えばいいかな？」

「何言うてますのん。ちゃいますよ、世界一のガンプラビルダーですぅ」

「それは予定、でしょ？」

キッチンから運んできたらしいグラスを二つ、彼は机の上へ置く。机といえどもそこは書類らしき紙の束で埋まっており、一度その紙束の上へグラスを置いてから彼は卓上を片づけ始めた。余計な脂肪のついていない腕には血管が微かに浮き、その体脂肪率の低さを垣間見せている。置かれたグラスを見てマオはゆるゆると四つん這いでまた移動し、机の前で腰を落ち着かせた。

半透明のグラスはまだ水滴を付着させることなく柑橘色の液体を蓄えている。そのグラスを片手に、少年は常日頃から緩めている口元を更に和らげた。

「なんやすみませんなぁ、お祝いなんて」

「本当はこじゃれたレストラン、とか考えたんだけどね。不審者扱いされそうだから」

「ようわかってますやん」

兄弟と呼ぶには少々歳が離れすぎているし、何より顔立ちが似通っているわけでもない。互い細身である印象は受けるものの、言葉のやりとりからして近しい存在でないのは明白だ。

彼らを繋ぐのは、部屋の隅にあるガラスケースの中身。ガンプラと呼ばれる模型が彼らを引き合わせ、繋いでいる。世界大会が開催され、催しとして一級の流行であるガンプラは、単なる模型と既に呼べないほどの進化を遂げていた。専用の装置が必要であるという条件は存在するものの、組み上げた模型を己の手で操り、ライバルとその出来を戦闘で以て競う。一昔前ならばあり得なかったであろう技術が世界に広がった今、ガンプラでの対戦はガンプラバトルの愛称で親しまれ、テレビ広告が流れるほど世間に知れ渡っている。

「ひとまずは」

「乾杯、です？」

グラスを突き出した青年に合わせマオも笑みをたたえたまま応えれば、グラス同士が軽くぶつかり合う小気味良い音が部屋に響く。祝いの席としては華々しさなど微塵も存在しない青年の自宅で、彼らは少年の祝杯をあげていた。

「いよいよ世界大会だね。目標は？」

「無論優勝です、っちゅーか、それ以外あり得まへんやろ」

片手にしていたグラスを両手で包みこむようにして持ち、グラスへ口付ければ甘さと同時に酸味が舌を喜ばせる。マオは果汁のみで作られたその甘みに頬を綻ばせ、スペースの作られた卓上へグラスを戻した。

「負けにいく人なんか、おりまへん。皆勝ちにいくんや」

「そうだね。それでもマオ君なら大丈夫でしょ？」

ガンプラバトルの世界大会が日本で執り行われるのは、原作である『機動戦士ガンダム』の生み出された場所であるが故、ガンプラ人口が最も多

い国であるからに他ならない。薫風香る頃合いに地域毎ブロック分けされた選手権が行われ、真夏の祭典と呼ぶに相応する世界大会への切符が振り分けられていくのだ。その大会に年齢の制限は存在せず、老若男女入り乱れ、己の技術を駆使して勝敗を決していく。

そして青年の住まう地域、第五ブロックと振り分けられたこの地域の覇者が、少年だ。未だ弱い十半ばにも達していない幼い顔立ちと体躯でありながら、彼の制作したガンプラ、そしてその操縦技術は他の参加者の追随を許すことなく、会場を圧倒させたのも記憶に新しい。

「当たり前ですやん。予選どころか決勝トーナメント、決勝でも勝ってワイが一番て見せつけます。ガンプラ心形流は伊達やありまへん」

トン、と小さく己の胸を叩いて張ってみせる少年に淡い笑みを浮かべて相槌を返す青年もまた、選手権の参加者だった。少年とは別ブロックであり、当たることもなく敗退した彼だったがそう勝敗に拘りはなかったらしい。気にした素振りを見せることなく今は少年の激励をしている。

同じ大会参加者である以前に、彼らは既知の間柄だった。平々凡々な青年と今よりも幼い頃の少年が出会ったのはもう数年も前の話で、幼少からガンプラ世界で一部雑誌にも取り上げられる程だった少年の追っかけをしていたのが、青年だった。少年が参加する大会に参加し、声をかけ、そして親密となっていった。少年の一ファンという名目での付き合いではあるが、こうして自宅へ呼べる程度にはマオもまた彼を信用しているらしく、他人の家でいながら緊張した面持ちは見せない。

「世界大会、行けたら見に行くから」

「そう言うておいていつもおるやないですか。ちゃんとお仕事せなあきまへんえ？」

片側だけ開いた眼差しで釘を指す様はその幼い年頃に見合わず、しかしそれでいて彼らしさを滲ませている。少年の言葉に苦笑しか出来ない青年はまた一口グラスへ口付け、中身を飲み干した。

「それで、お祝いなんだけどさ。何か欲しいものあるかな？ PGにしようかと思ったんだけどマオ君全部持ってそうだからどれにしたらいいかわからなくて」

「まぁ確かに、ガンプラ素材に困ってはいまへんなぁ」

首を上向け、虚空を見上げる少年の動作と相まって彼が被っている帽子がずれる。選手権優勝の祝いの品として何かしら準備したかった青年だが、生憎そう給料が高いわけでもなければ少年がどんなものを好むのかも知らない。下手な物を買うくらいならば本人に聞けば良い、という安直な考えは崩した貯金の一部を懐へと忍ばせていた。

「せやねぇ……、そしたらちょっとオネガイ、聞いてくれます？」

「何でも」

天井へ向けていた眼差しを戻し、青年を真っ向から見返したマオはグラスを脇へと追いやり、前のめりになっている青年へほくそ笑みを浮かべてみせる。

「そない簡単になんでも、なんて言うたらあきまへんやろ。ま、高価なものおねだりするつもりもありまへんけど」

青年の胸元へと視線を向ける姿は、まるで其処にしまい込まれているものを把握しているようで、苦みのある笑みすら青年は零せなくなる。脇へと追いやったグラスが未だ中身を残している中、マオはその身体を猫のように伸ばすと近づいた青年の耳元へ囁きを落とした。

「ほんなら、お兄さんの好きなことしましょ？」

囁きがもたらす艶やかさに青年は知らず身震いを起こす。時の流れが緩やかになったと錯覚せんばかりの言葉に視線を少年へ合わせつつ身を戻せば、その口元へやはり笑みを浮かべたままのマオが妖艶に佇んでいた。

「マ、マオ君？」

「いつもなら外で会いましょ言わはるのに、今日は自宅で、なんて。気付かんとでも思います？」

己の口元へ指を宛がい微笑む彼は何もかも悟ったと言わんばかりに、その饒舌を止めない。

「ワイのファン言うていつも見に来てくれはったけど、その実は、っちゅうところちゃいますのん？」

「ま、待って待って、おかしな話になってるって！」

狼狽する青年に対してマオは笑みを崩すことなく悠然と机を回り、青年の横へ移動する。隣に腰を下ろし、見上げる彼は、慌ててばかりいる青年に対してそっとその手を伸ばし、案外引き締まっている胸元へと手を置いた。

「ちゃいますのん？」

繰り返される問いかけ。焦りを臆面に浮かべて狼狽えてばかりいる青年のその姿がマオの言葉が真実であることを物語っていると青年は理解せず、

鎌をかけたマオからすればその狼狽こそが陳腐な姿だ。
「ちゃいますなら、悪いこと言いましたけどぉ」
宛がっていた手を離し、口元へ浮かばせた笑みは絶やすことなくマオは距離を取ろうとする。そして、そんな離れていった手が彼の膝元へ戻り際、
「違わない、です……」
少年の聡さに内心舌を巻きながら、青年は降伏を口にする。同性でありながら性的な好意を持っている事実を認めるのは青年にとって初めての経験で、手を取りながらその頬は真っ赤に染まり上がっている。何より、押し隠していたはずの想いを悟られていた事実が彼に羞恥を与えていた。
「マオ君が好きです。初めて声をかけた頃から好きです……」
「知ってました、っちゅうかばれてへん思うてはるのも見てておもろかったです」
青年が掴んでいるマオの手は比べるまでもなく小さく、そして幼い。この国において互い好意を抱いている相手であろうと一定年齢以前の少年少女へと手を差し向けることは犯罪とされている中、彼は暴かれた己の想いを言葉とし、そして暴いた少年は楽しげに喉を鳴らす。
「まぁ、アレです。そういう目で見ておいて手ぇ出さんかったのは立派やと思いますけど、部屋に呼ぶのはもうあきまへんって」
「や、でもほんと今日はそんなつもりじゃ……」
青年に取られた手へ力を込めることもなく、悠然とした微笑みを浮かべていた彼は空いている手を己の口元へ運び、小首を傾げてみせる。
「ほんなら、やめます？」
裕に十は離れているであろう青年を手玉に取って、マオは笑みの質を俄かに変えた。単なる柔らかな微笑みから、妖艶を帯びた笑みだ。感情に逆らうことなくよく変わる彼の臆面が変化していく様を間近で捉え、薄く開かれた眼に男は魅入られる。用意していた答えを唾液と共に飲み込ませ、少年が用意したであろう言葉を発するのは、青年だ。
「やめたく、ないです……」
「人間素直が一番ですぇ？」
コロコロと笑い出したマオはその眼を再び糸のように細め、口元へ当てていた指を青年の唇へ触れさせる。
「ワイの戦勝祝いっちゅう場所作ってくれた御礼やさかい、遠慮せんでええですよ？」

腕を伸ばした拍子に少し緩めに取られた肩口から服がずれ、日頃見せない肌が青年の視野に飛び込んできた。白く華奢で、それでいて少女とは異なる骨ばった印象を与える肩は躊躇いに惑っていた男を行動へと移させる。
手を取ったまま乱雑に物が散らかっている床へマオを押し倒し、彼は少年の服の裾から手を差し入れた。手から伝わる体温以上のこもった熱が興奮を助長させ、押し倒した刹那漏れ出されたか細い声が男を煽る。指と言わず掌全体を以て腹部から徐々に胸元へと移動させながら、その肌のきめ細かさに知らず青年は喉を動かした。
己の性癖を理解しているからこそ、彼は他人に触れることから避けていた。無論、潔癖性の類とは異なる故に握手をはじめとした挨拶を避けたりはしないが、他人と深く関わり合おうとはしていなかった。
今眼前にいる年端もいかない、マオをはじめとした少年少女。青年が欲情を催す対象が十代前半の彼らであると自覚したその時から、彼は己の臆面に仮面を被せ、ひっそりと生きてきた。そして今後もそう生きていくつもりであった。
「そんな焦らんでも、逃げまへんよ？」
掌が覚える肌の滑らかさが呼吸すらも止める。乾いた己の肌と異なり、瑞々しさを蓄えた少年の肌は掌で撫で回しているだけで心地よく、マオの呼吸に合わせて上下する体躯の細さがまた青年の欲情を誘った。うっすらと頬を鴇色に染めて、急くようにして身体を撫で回してくる青年へと腕を伸ばしたマオは今一度その白い指先を彼の唇へ当て、片目だけ開き艶やかに笑う。
「ちゃんとベッドでしましょ？　床でするんは身体痛なります」
笑んだまま提案する彼に言葉もなくただ相槌を返せば、マオは喉をまた小さく鳴らして身を起こす。はだけた肩口を直すこともなく自ら進んで部屋の隅に置かれた寝台へと向かっていく少年の背中を眺めること数秒、立ち上がって彼に倣い日頃ならば何を思うこともなく休息へ就く寝台へ腰を下ろした青年は、改めて少年の臆面から全身を舐めるように見つめた。
いつからかトレードマークとなった目深な帽子に、緩やかさを押し出した衣服。手を差し入れる隙間を幾多にも作り出しているその格好で少年は表情を変えることなく眼差しを向けている青年へ視線を返し、動いた。
もたれ掛かるように身体を青年の肩へ預け、服越しに体温を伝える。緩やかなシャツは青年の視野へ少年の胸元を晒け出し、色白ながら健康的な

肌の内二カ所、垣間見える箇所があった。
「何処見てるんか、顔見んともわかりますわ」
クツクツと笑う少年は動けない青年に代わって己の手で彼の腕を取り、舐る視線の元へと触れさせる。ただ寄り添われるだけでは感じ得なかった彼の鼓動が掌から伝わると共に、細身にしては肉々しい感触が男の息を噤ませた。
娼婦のように男を誘う術を知っている少年は、服の上へ宛がわせた手が緊張で強張るのを確かめつつ、しなだれ掛かっていた身体を揺り動かす。高鳴っている鼓動は彼の頬に色を与え、寝台で腰掛けたまま彫像のように動かない青年の足下へと移動したのは青年から動かなかったからに他ならず、膝を立てて男を見上げながらそれまでの笑みに苦みを加えてみせた。
「兄さん、もしかしなくても」
「その続きは言わないで」
少年の言葉の続きは言われずともその臆面が物語っており、居たたまれないやら羞恥心やらに苛まされた青年は顔を彼以上に赤く染め、顔を背けた。十以上も歳の離れた少年に知られたくなかった、性行為が初めてであるという事実をいとも容易く暴かれ、顔から火を放ちそうなほどの羞恥にまみれた彼だったが、そんな彼の思惑を余所にマオはジーンズに覆われた青年の股間へと手を忍ばせていった。
「ま、誰にでもハジメテはあります。ほんなら筆下ろしといきましょ？」
相貌に見合わぬ言葉を口に、少年の手が蠢き始める。卓上の埃を確かめるような指の腹だけで周囲を這い回ると、服の下に存在する男根へ触れさせる指の本数を増やしていく。緩やかに這い回り、それでいて確かな悦楽を与えるのは、根本と言わず先端までをしっかりと把握して蠢かせるからだ。こそばゆさ以上の悦に思わず吐息を漏らし、屹立を露わとする服の膨らみにマオは笑う。
「あんま抜いてへんの？　ちょっと触っただけですやん」
時間にすれば確かに短い。しかし男からすれば恋い焦がれていた少年が己の陰部を弄び、そして笑んでいるのだ。興奮しないわけがなかった。
口角を吊り上げたまま、マオはジーンズを脱がせにかかる。ボタンを外し、ジッパーを下げるだけの動きは緩慢。それでいてわざと青年の陰部へと刺激を与える指先を宛がったまま、眼前にある箇所を紐解いていった。
「パンツに染み、出来る前でよかったですわぁ」
熟知しているのだろう。煽る言葉を選んで口にする少年が下着を持ち上げる箇所を一度爪先で一撫ですると、意志の範囲外で陰茎が大きく震えた。興奮は血流を速め、己の鼓動と同じく激しく脈打つ陰部に恥じらいを覚えるも、楽しげに下着を剥いた少年を見て、言葉は喉から発せられることなく飲み込まれる。
「ご立派ですやん」
一つ、長い吐息がマオからもたらせられる。彼の眼前には下着をずらしたことで露わとなった青年の一部が在る。それは先端の傘を広げ、空気に触れさせた途端に硬直を増し、マオが手先を持っていっただけで粘液を溢れさせた。
「あんま簡単に果てられたらおもろないですから、ね？」
浮かべられている笑みが不敵さを伴わせ、青年の陰茎を握り込んでいる彼は間近にある怒張へと唇を触れさせていく。粘液で濡れた切っ先が割開かれた少年の口腔へ誘われていく様を、青年は瞬きすることなく見つめ、滑る頬壁の感触に全身を震わせた。
マオの小さな体躯は、無論のことながらその口腔も小さく狭い。対する青年の体躯はそう高身長と述べる程でも無いものの、その怒張は他の動物を連想させるほどに長く、そして太かった。小さな口腔へその陰茎を押し込めるには顎を極力開かねばならず、時折くぐもった声と鼻で紡がれる呼吸音が淫猥さに拍車をかける。
根本半ばまでで限界なのだろう。余らせた箇所へと手を忍ばせたマオは口内にある先端へ舌を這わせ、握り込んだ手を上下に動かす。陰茎から奔る確かな快感が青年の背を逸らさせ、その動きはマオの喉奥を突く行為に等しく、一瞬呻き声が放たれた。それでも少年は口腔から性器を引き抜くことなく、寧ろ青年を臨界へ導く動きを強めていく。舌を絡め、手でしごき、唇を窄めて吸い付く様全てが青年を昂ぶらせ、筋道を這わされた瞬間先端の赤黒い亀頭は膨らみを増した。口腔だけに飽き足らず、刺激を強める為か頭を降り始めたマオの頭から帽子がずれ落ちる。
「先走り多いですわ……口元べちゃべちゃ」
もう達してしまう。内腿に奔る悦を伴わせた痺れに少年の髪を撫で梳いて耐えていれば、徐に口を離してマオは軽く咳き込む。口回りは彼の言葉通り粘液と彼自身の唾液とにまみれて淡く光り、その薄い唇そのものが強調されているようだ。握り込む怒張を離すことなく、彼は口元を舌で一舐

めすると、放出を阻まれて幾度も跳ねる陰茎へ口付けを落とす。
「初めて言う割には我慢できますやん。けど、そろそろ限界です？」
青年自身が感じ取れるほど、怒張からは強い臭気が放たれている。汗と粘液、そしてマオの唾液が入り交じった淫らなその香りが彼から理性を奪い、彼は宛がっていた手で彼の頬を撫でると、求めるように己の陰部へと押しつける。荒い呼吸と、日頃と異なる手荒な行為に少年は小さく喉を鳴らすと、今一度先端へ口付けて口腔へ誘った。言葉すら失った青年の求めに応じ、舌先から根本までを使って怒張を舐り、怒張の下にぶら下がる陰嚢をゆるゆると揉みしだく。口腔で幾度となく跳ね、その都度粘液を零す先端は上顎を擦ってマオの頬を火照らせていった。
筋道へと昇り来る感覚に男の足が微かに痙攣し始める。これ以上耐えるのは無理だと判断したのか、彼は咥えたまま首を振り、舌を絡める少年の頭を離そうと彼の額を抑えるが、マオはそんな彼の思いをどう受け取ったのか、うっすらと見開いた眼を彼へ向けたまま刺激を止めない。
「マ、オくんっ……！」
「ん、ぶ……っ、んぐっ！」
眇め見られたと意識した青年は呆気なく臨界へと達する。興奮を助長させる眼差しを向けられていると知り、未だ口腔へ突き入れたままと理解しながら、己の欲望を彼の喉奥へと注ぎ込む。額へと当てていた手は頭部横へと移動し、マオの意志を妨げる力で押さえ込んだ。口中で放出しながら暴れ回る怒張が男を愉悦へ浸らせる中、先走りよりも濃く、そして青臭い精液をマオは内頬へ溜めつつ、筋道内の残滓まで吸い上げる。放たれた瞬間、唇の隙間から漏れた粘液は酷く緩慢にマオの顎へと伝い、その粘度の濃さを如実に示していた。
ずろ、と音を立てて最後の一滴まで吸い尽くす。押し込められていた怒張が少年の口元から徐々に現されていき、その小さな口にそぐわない赤黒い性器が吐き出された。彼の頭を押さえ込んでいた青年は愉悦に浸って声を上げることも出来ず、扱きながら先端の切れ目を舌先で舐ったのを最後にようやくマオは唇を離した。
「頭抑えるんは反則、ですやん？」
口元から見せる舌は彼の着ているシャツに近い薄桃色を保ち、器用にもその奥へ白濁を乗せたまま彼は青年を見上げている。怒りを覚えているような素振りはない。だが無理矢理に、あわや呼吸を止めさせかねない事をしでかしていたと気付いた青年が平謝りを繰り広げようとその臆面へ眉を寄せれば、少年は舌上へ乗せていた白濁を彼の眼前で飲み下した。
「ちゃんと反省してくれはるんでしたら、許してあげます」
「すみませんでした……」
妖艶な笑みと飲み下したのを見せつけるように口腔を開く少年に、青年は口内に溜まった唾液を嚥下してか細く返す。
マオの艶やかさは、少年のそれではない。もっと淫猥で、眦へ軽く浮かべられた涙すら欲情を煽り、彼と視線を合わせたまま動けずに居る青年へ、マオは魅せるようにその指を下肢へと這わせていく。
「せやけど、あれだけ濃いんですもん。まだ、いけますやろ？」
青年の足下に居た彼はゆっくりとした動きで寝台へと乗り込む。四つん這いで青年の隣に並んだかと思えばそのまま青年の上へ座り込み、向き合ったまま己の口元へ指を宛がった。
「脱がせてくれます？」
既にはだけている薄いシャツへ手を掛け、中へ空気を送り込むように数度はためかせれば、その奥に隠れている胸元へ青年の視線は釘付けとなる。青年の口元へ指を押しつけたかと思えば頬を滑り、腕を巻き付かせた少年の動きに躊躇いはなく、男はおずおずとその手を彼の下半身へと向けていった。
太腿へ下ろされていた尻肉を持ち上げ、腰を浮かせる。肩から吊しあげているズボンは軽く引くだけでするすると落ち始め、青年へもたれ掛かりながらマオは自らの足下へズボンを落としていった。露わとなる白い下着はその体躯の幼さに見合った愛らしさを保ち、それでいてしまいこまれている陰部が反応を示して膨らみを作り上げているのがわかり、落とされたズボンは衣擦れを残し寝台の外へ落とされた。
「好きにしてええですよ？」
狭い室内で、少年は耳元へ寄せた唇でそっと囁く。未だ日は高く窓外からも明かりが零れる最中、痴態を魅せるマオは回している腕へ力を込めて肌を密着させ、青年の動きを待った。青年の能動性を試すかのような言葉と仕草が、彼の腰へ宛がわされていた手を動かす。
慎重に、壊れ物を扱うかのような手つきでマオの細い体躯を撫で始めた手は露わとなった下着へ目指し這い回っていく。下腹部、太腿、そして密着して眼前に供えられた首筋へと唇を寄せれば小さく声が漏れ出される。

肌へ吸い付き男が気付いたのは、うっすらとその身体が汗ばんでいるということだ。涼しげな面立ちを変えずにいながら、それでも火照らせていた頬とその塩気を覚える肌がまた興奮を煽り、達したばかりの陰部が首をもたげ始める。

「下着、汚しとうないんやけど……」

暗に脱がせろという少年の意を汲んで、男は下着へとようやく手を掛ける。引っかかりを覚えるほどに勃ち上がり、慣れない手つきながら剥ぎ取れば乾いた音を立ててマオの幼茎が空気に晒される。肌と等しく白いそこは、彼自身の下腹に当たって震え、先端まで包皮に覆われている姿が幼さに拍車をかけていた。

「そんなマジマジ見てぇ。やらしいですわぁ」

吐息を吹きかけて意識を逸らさせた彼は、密着させていた身体を僅かに離し、己の手で現された陰部を握り込む。微かに肩を震わせて悦楽に酔いしれた表情は青年を煽るには十二分過ぎ、彼はマオをかき抱いた姿勢で寝台へと押し倒した。

「急に積極的になるとびっくりしますやん」

日頃細められている両眼を見開きながら驚きを露わにしたのも束の間、少年はまた余裕の笑みで青年へ両腕を広げる。したいようにしろ、と言わんばかりのその仕草に青年は己の余裕のなさを認めるように微かに笑うと、そのまま彼の股の合間へと身体を忍ばせていった。

体躯を寄せ合っていた時とは異なる視点から、マオの恥部を具に眺める。大きさは彼の体躯に見合って未成熟さを保ち、それでいて確かに上向いている姿は卑猥そのもの。皮膚の質は既に触れている箇所からも知れているが、他人へそう易々と晒け出さない陰部はまた一味も二味も違って見えた。

喉を鳴らし、青年は恐る恐るその無骨な手をマオの陰部へ向け、触れる。かき抱いていた時に感じた子供特有の高い体温よりも更に熱いその箇所は、青年の手で全て収まり、軽く握り込めば応えるように僅かばかり震えてみせた。

青年自身がマオと同い年だった頃、こんな表情をしていただろうか。そう思わせるほどに視線だけを向け垣間見た少年の臆面は艶やかで、肉欲を求める姿に呼吸すら止まってしまう。それでも握り込んだ手を離すことなく動かし始めれば、寝台へ寝転がったままだったマオは自ら膝を立て、腰を揺らめかせた。

痴態を晒し、貪欲なまでに悦楽を求める様はガンプラバトルに興じている彼と重なるところもある。己の欲求を満たそうとするその集中力、そして少年自身は無意識かも知れないが、他者を楽しませる振る舞いは彼自身の本質的なものなのかも知れない。

「ンッ……」

甘い吐息に混ぜ込められる声色は声変わり前なのもあってか少女のようで。しかし彼へ確かな悦を与えているのは女性にない性器であるそのミスマッチさが青年の内で欲を燻らせていく。顔の脇に立てられた足は細く、ムダ毛もない。汗ばんだ肌とはいえ何処か甘さを携えた薫りに酔わされながら、青年は握り込んでいる部位を重点的に攻め立て始め、全体を包皮に包んだ幼茎の中を暴こうとする。

「もう剥けるの？」

「試してみてええですよ」

指二本で挟み込むようにして包皮をずらせば、すんなりと幼茎はその奥に潜められていた亀頭を現した。未経験の幼子ならいざ知らず、寝台で横たえている彼はそう痛みを覚えた様子もなく不敵な笑みを湛えているが、彼の表情に反して幼茎は二、三度大きく震えた。

白い包皮から剥き出された箇所もやはり青年のソレと異なり、少年の舌先と同じく薄桃色をしている。色付き薄く、子供の形をしていながら反応は大人に等しいその恥部を凝視し、青年は無言のままその幼茎を己の口腔へ運んだ。

「んぁっ、剥いたばっか、ぁッ！」

一際大きな声が部屋に響く。年上の男を相手取りながら口元へ笑みを絶やすことの無かったマオのその反応は微かに焦りを滲ませ、その声音が青年に勢いを与えた。

口腔へ挿入りこんだ幼茎へ舌を絡めれば背中が反り、陰嚢を手の内で緩く転がせば矯声が溢れる。マオが男の陰茎を口にした行為と同等の、しかし男からすればそう大口を広げる必要性もない恥部は根本まで彼の口内へ納められ、舐る毎に大きく振れて上顎を擦った。青年の放つ唾液が潤滑油代わりに滑る感触は着実に幼子を追い立て、悦楽に耐える為か閉じようとする足を男は片手で容易く押さえ込む。閉じることを許されず、そして全身へ奔る快感が呼吸を早め、シーツを掴んだ腕は必要以上の力を込めて緊張したまま震え続けた。

「そん、な吸わ、……んぃイッ！？」
駄々をこねる子供のように左右へ幾度も首を振り、悦楽をやり過ごそうとするも、その程度で流せるような刺激ではない。舌先が先端と包皮の合間を舐め上げ、マオがしていたのを真似るように頭を振って律動を再現すれば、小さくも確かな男性器から粘液が溢れ出る。堪えるように唇を閉じて鼻を鳴らす様すらも愛らしく、男はこのまま臨界へ導きたい思いと裏腹に、幼茎への刺激を止める。
「……ぅ、ア……なん？」
唐突な制止に涙で濡らした瞳を向ければ、顔を上げた青年と視線が交わり、物欲しげに無言のまま瞳を揺らすが青年は幼茎へ触れることもなく、マオの上へと覆い被さって臍面を近づけた。
「もう……、辛抱出来へんのです？」
独特のイントネーションを保った声が青年の耳朶を打ったかと思えば、達する寸前だったのか不自然に身体を痙攣させながら気怠げに彼はその身を起こした。
マオの言葉通り、青年の陰部は先に達していたにも関わらず今や上向いて更なる悦楽を求めて脈動し、本能に抗わず求めようとする男へマオは薄い笑みを向けた。
「タガ外れるとあきまへんなぁ、お兄さん？」
窘めながらも彼は青年の手を取り、胸元へ触れさせる。高鳴り続ける鼓動へ意識を向けさせたいのかと胡乱気に眉を寄せれば、二回りは異なるその手をマオは胸元の突起へと運ばせ、片一方の手で自らもその突起を弄繰り始めた。
「辛抱たまらんのはコッチですやん。焦らすの、お好きです？」
宛がった掌から伝わる突起はただ在るのと異なり、確かな感触を覚えさせる。人体の不思議、等と妙な連語を思い浮かべながら、彼が求めているであろう微弱な悦をこれ与えつつ、取られなかった指を陰嚢の更に奥、臀部の狭間へと忍ばせると薄笑みが呆れたと言わんばかりに切り替わった。
「身体の大きさ全然ちゃいますのにやっぱ挿入たいんや、変態さんやなぁ、お兄さん」
ぐうの音も出せない青年はその言葉を拒否と捉えて指を離すが、マオはその全体重を青年へ掛けて寝かせると、彼の上へ馬乗りとなる。
「……辛抱たまらん同士、お互い気持ちようなれたらええですもんね」
片目で眇め見ながら青年の胸元へ手を置いた彼は期待に息を呑む青年の眼前で、宛がっていた指先を舐り始めた。敢えて音を奏で、舌を絡める指の本数を増やし、引き抜き際その体液を青年の胸元へ零す。
「けど、いきなりは流石に無理ですわ。ちょっと準備、させてぇな？」
銀糸を引いて垂れ落ちた液体は、何れ拭われるか乾くかして消える。零された箇所だけ冷えた感触を覚え、それでも沸き上がる熱が青年の額に汗を浮かばせて興奮の度合いを示し、ほくそ笑む少年は彼と視線を交えながら舐っていた指を己の臀部の狭間へと忍ばせていった。
「この格好やと、挿入ってるかはわからへん？」
言葉には首肯しつつも、腕を後ろに回して胸元を晒しながら蠢く様は淫猥の一言に尽きる。上体を反らしたことで確かに尻の中へ指が挿入りこんでいるかはわからないが、胸元へ垂らされた体液とは異なる粘液が晒されている幼茎から零されていく様子は視界に納められ、青年の怒張はその膨らみを着実に増していった。
色白い臀部の奥、胸元の突起と同じ薄桃色を保った菊門は忍ばされた指が触れると収縮し、自ら触れながらマオはそっと吐息を漏らす。
達する寸前だったのだ。身体の奥で渦巻く熱は陰部への刺激を求め、回している腕を前へ運びたい衝動を堪えつつ、彼は己の秘部へ指を這い回して身体の緊張を意識的に解いていく。指先が捉える皺を引き延ばすように、後肛そのものへいきなり指を突き立てるのではなく指腹を滑らせる。微弱な悦が身体を奔るものの達するには程遠く、そのもどかしさがまた少年の口から熱を伴う息を紡がせた。
「ンっ……」
鼻を通す甘い吐息で指を侵入し始めさせたと青年に知らせる。肌を触れ合わせている以上に体内は熱く、自らの指と知っていながらその侵入を悦ぶかのように身体は一度大きく震えた。鼻孔を膨らませ、細い姿態は次第に指先の感触へ集中していく。体勢を維持し辛くなったのか、青年の胸元へと身体を折り曲げ、より深く自らの指を挿入りこませていれば、その火照った頬へ武骨な手が触れてきた。閉じているのか開いているのか、判別の付きにくいマオの眼差しを見つめていた青年は顔を向けられたことで視線が交わっていると知る。
「辛くない？」
「優柔不断やなぁ。挿入れたい言うたのお兄さんでしょうに」

気遣う言葉にまた一笑み零しながら、マオは身体を伸ばして青年の頬へ口付けを落とした。
「せやったら、きつくならんよう慣らしてください」
シーツの上へ無造作に投げ出されていた腕を取り、秘部へと回させる。青年の手は心地よい弾力を保った尻肉に宛がわれ、マオの指が引き抜かれた秘部へと運ばれると、まるで名残惜しいと言わんばかりに菊門は元在った少年の指を求めて収縮し、当てられた青年の指に吸いついた。
マオの体躯に備えられている箇所だ。其処は当然小さい。青年はいったい何処まで挿入るのかわからない秘口へ触れ、すぐに突き入れず彼もまた自然その周囲へと指を這い回らせ始めた。既にマオ自身が穿っていたこともあって予想よりも柔な感触に心臓は高鳴り、ただ這わせるだけでなくヒタヒタと叩いてやれば、都度少年は短くも昂った吐息を漏らした。
「ほんま、やらしいおすなぁ……」
すぐに挿入されると思っていたのだろう。想像外の焦らしに耐えきれず、ねだるように腰を振って言外に解すよう求めれば、叩いていた指は爪先を中心へ当て、
「ッン……っ」
ツプ、と濡れた音を立てて挿入を果たす。二回り以上異なる身長と等しく、やはり青年の指はマオのものより太く、そして長い。中指を突き入れながらその第二関節、第一関節と順繰りに押し込んで中の熱を確かめ、対する少年はその侵入に悦ぶ己の体躯を自覚し、艶めいた笑みを溢れさせた。
「中で、折り曲げたりして……？」
根本まで指が挿入り込み、秘部はマオの意志に反してきつく異物を締め上げる。青年の胸元へ置いた手はいつの間にか拳を形作り、体内から奔り来る悦に耐える姿勢を整えていた。言葉に従い指はただ締められるだけに留まらず、肉壁を傷つけないよう細心の注意を払われながら蠢き始める。そう大きくはない臀部を空いていた手で更に割り開かれれば、冷えた空気が恥部を撫で、体熱と空気の冷たさの相反した感覚にマオは背筋を粟立たせた。堅く握りしめた拳を震わせ、水音を立てながら注挿を繰り返す秘口へまた新たに指を増やされては息を詰めるのも無理はない。それでも青年の愛撫を止めることなく、寧ろ更にねだって腰を揺らし、眦から涙を一つ二つ零した彼は縋るようにして固めていた拳を開いた。
「このままの姿勢で、ええです？」

くすぶり続けた熱が吐息となって露わとなる。色すら感じるその吐息を間近で聞かされた男は首を縦に振ることしか出来ず、突き入れていた指もそのままに動きだけを止めた。従順な態度を続ける青年の頬へ今一度口付けたのは、マオにも理由はわからない。肉欲を欲して止まない体躯を持ち上げて体をずらした彼は、そのまま後ろ手で男の興奮の象徴たる怒張を取り、腰を浮かせる。
青年の視野からすれば己の体躯の上で乱れた髪を直すこともせず、小さく柔な手で陰茎を握り、臀部の狭間へと誘う少年の姿が広がっているのだ。過呼吸を起こしそうな程に呼吸は速まり、このまま心停止するのではないかと錯覚する脈の速さを抑えようと、身体には無駄な力が入り続けるのも致し方ない。
「ほんなら、筆下ろしといきましょか？」
これ以上無い卑猥な笑みを浮かべ、秘口へ宛がった切っ先を埋め込まんと腰が緩慢に沈められていく。
「んっ、くぁ、や、っぱ、ふとッィ……ッ！」
引き結ばれていた唇が呆気なく割られたと思えば、苦しげな声が漏れ出される。切っ先の傘まで辛うじて納めたところで腰を止め、青年の下腹部へ下ろした手を今にも崩れ落ちそうに震わせながら、マオは呼吸を整えようと深呼吸を繰り返す。幾ら慣らしたとは言え、彼の後肛には過ぎた怒張だ。そうすんなりと収まるわけもなく、それでも逝り続ける肉欲は肉棒を受け入れることしか考えさせない。少年に無理強いをしたわけではないが、それでも無茶をさせている気がした男は不安げに眉根を寄せてみせるが、マオはそんな彼に一つウインクを返し、整えた呼吸を再び荒げつつ腰を下ろしていった。
怒張は確かに飲み込まれていく。青年の眼前に広がる光景と相まって肉棒は狭い秘口を掘り進め、下肢を痙攣させながらも懸命に飲み込もうとする少年の痴態が彼の理性を張り詰めさせる。柔な肉壁に包み込まれ、切っ先と言わず男根を包む襞の感触は、気を抜けば今にも達してしまう悦を与える中、彼はマオの動きが止まるまで微動だすることなく悦楽に耐えた。
「挿入れながら、おっきく……せんといて、くださいよ……」
掌に包まれていた箇所が襞に覆われるまで、どれくらい時間を経ただろうか。不規則な痙攣を繰り返しながらもまだ余裕を見せんと笑んで彼の手を取り楽な姿勢を促せば、素直にマオは男の胸元へしな垂れかかった。

「中、あっついですわ……」
笑い呼吸を整えた彼は、姿勢をそのままに臆面だけ青年へ向ける。
「もう、動いてええですよ？」
吐息と合わせて甘美な悦を求め、肉壁が蠢いた。薄く開かれた片目だけで眇め見るその表情と言葉が、とうとう青年から理性を切り離させ。
「ッ、ンィいイッ！？」
双丘が変形するほどの力で尻肉を掴んだ途端、襞を押し返して微かに跳ねるばかりだった怒張が律動を開始する。排泄器官であるはずの秘口は飲み込まされていた陰茎を露わとし、内臓が引きずり出される感覚に打ち震える暇もなく抜き出された竿が再び押し込まれると、マオの口からは裏返った矯声が上がった。挿入にあれほど苦悶の臆面を浮かべていながら、突き動く衝撃は少年に霰もない声を上げさせるほどの悦を与え、半開きとされた口元から唾液が零れ落ちる。
内を抉れば身体が跳ね、うねる襞の裏側に存在する器官を押し込んだ瞬間、少年の痩躯は強い悦楽で大きく震えた。
「い、きなり……は、げし、ヒぅッ？！」
目元から零れ落ちる滴は頬を伝わせ、時折宙を舞ってはシーツに落ちる。注挿の動きは下になっている青年が腰を振るう度に肉を弾き、怒張が抜き出れば自然狭まる肉壷は、少年が魅せる悦と同様蠢き肉欲に打ち震える。腰と言わず尻肉を掴まれて固定されたマオはその体位から自ら逃れようもなく、そして変える気すら起こっていなかった。
「んぃっ、ン、んぅうウッ！」
秘口を突かれれば背筋を駆け上がって脳髄まで響く衝撃は、苦痛以上に淫らな感覚を彼へ与え、そして彼も欲した。寝転んでいる青年の胸元へと頬を押しつけ、突かれる度に身体を揺らしながら矯声を上げる様は青年が所有しているAV女優の誰よりも淫猥で。
「ッア！？ そ、こぉっ！」
秘部へと陰茎をねじ込んでいれば、徐にマオの身体が大きく震え、声に愉悦が入り交じった。続けられる注挿の中で肉壁の奥にある固形が与える強い快感を認識したのは、其処へ狙い定め腰を振った青年に対し、声すら上げられず身体を痙攣させる彼の姿があったからだ。
「そこばっか、あきまへん、ってぇ……ッ！」
涙声混じりに胸元へ宛がわれた手が拳を形作るが、青年は止まらない。見つけだした器官を狙い、抉り、指を食い込ませた尻を撫でたかと思えば、その手をマオの胸元へ移動し、淫らな色に染まった乳頭をこねくり回す。
「ンァッ！」
小さな矯声を表した彼が反応しているという事実に青年もまた荒い呼吸の中で満足げな吐息を漏らした。
固められたまま震えている手を見やり、律動している逸物と大きさを比較する。流石に腕ほどの太さもないが、それでも少年の体躯には見合わぬ質量で攻め立てているのだ。彼に掛かる負担は吝かでない。しかし眼前に居る少年は口元を半開きにしたまま虚ろの眼差しで喘ぎ続け、日頃見せる余裕ある笑みとは程遠い、与えられ続ける刺激に抵抗も出来ず身体を不規則に痙攣させている。
「ンィ、ひっ、んぅウぅッ！」
言葉と呼ぶのも烏滸がましい、そんな矯声でもマオが着実に臨界へ近づいているのは伝わり、同時に肉壁が締まって青年も己の限界を感じ取った。
「ヒぅ……、え……？」
臀部を引き掴んでいた手を離し律動を中断した青年に、貪り霰もない様を晒し続けていたマオが不服気な声を漏らしたのも、ほんの刹那。
「ンァ、ァアアッ？！」
滑らかな下肢へ両手を運んだ青年はその体躯差をいいことに繋がったまま少年を寝台へ押し倒す。足首は青年の手で丁度一回りする小ささで、その幼い少年を犯していると改めて認識すれば青年の興奮は頂点に達した。
「いぎっ！ ヒッあぁ、か、ぁあアッ！」
抜き出された怒張に絡み付いた襞が青年の視野に収まる。今一度腰を振って中へと押し込めば襞もまた中へ戻るものの、吸いついて離さない肉壁は無意識に肉棒を締め、強い悦楽が青年の口から吐息を漏らした。
マオを寝台に押し倒した今、青年の視野には彼の全身が映り込む。律動に喜び震える様も、その震えとは別の生き物のように跳ねる幼茎も、他と比較して肉付きの良い尻の合間に収まる己の怒張も。
そしてなにより、乱れ解れた髪と共に在る淫猥な臆面も。
全てが彼を煽り、そして律動の速度を上げる要因だった。
「ぁっ、そん、なはげ、しッ！」
律動に伴う疲れなど感じない。抉り、抜き出し、そして突き込む。繰り返す律動は確かに男を、そしてマオを臨界へと近付け、少年の陰茎から止

め処なく零れる粘液が新たにシーツへ溜まりを作り出す。
「あきまへんっ、も、イく……イっ、ひン、ィッ！」
臨界寸前であることを口にした少年へ、青年は獣の如き突き入れを繰り返し、片足を下ろしながらシーツへ淫液溜まりを作る幼茎を扱き上げた。包皮を下ろし、露わとなったままの先端を指の腹で撫で、これ以上無い硬直を見せていたその幼茎の口が、大きく開く。
「ンイッ！ィ、ンゥウッ！！」
コツ、と音を立てて骨盤を擦り合わせた瞬間、マオの背が大きく反って内壁もうねりながら圧迫する。強く、そして搾り取るその刺激に青年は抗う術もなく、己の欲望を少年の中へと噴射した。
「っあ、っつ……ッ、ナ、カぁ……」
悲鳴にも近い矯声を上げて達したマオは身体をひくつかせ、それでも意識を手放すことはなかったのか、体内へ放出されている欲の存在を口にする。放心に近いその臆面は口元を己の唾液にまみれさせ、虚ろな眼差しを壁へ向けたままで、下肢と言わず体躯を痙攣させる様を見つめながら青年も空になる勢いで噴出を繰り返す。
少年が放った青臭さと、どちらの物ともつかない汗の匂いがふと香り、肉欲にまみれていた感覚が次第に正常へと戻っていく。それでも未だマオの内へ陰茎を突き込んだまま動かずにいれば、気怠るげな面もちでマオがその顔を向けてきた。
「お初モノ、ゴチソウサマでした」
身体に無理をさせたにも関わらず、彼はそんなことを呟いて笑みを浮かべる。額から汗を零れ落とし、目を細めて微笑む彼の頬に残った涙の跡を拭おうと手を伸ばせば、彼はその手を取って笑みを更に深めた。
「何か言うこと、ありまへんの？」
小さな手。掴まれながら男はそう思い、彼の問いかけに暫し思考を巡らせると、
「お粗末様でした……かな？」
自信なさげに発せられた言葉に少年は吹き出し、その屈託無い笑みに間違えたと知りつつも男は苦笑してみせる。
「ゴム用意してへんのはまぁしゃあないにして、わい女の子やったら大変でしたよ？」
クスクスと喉を鳴らし、自ら動いて青年の陰茎を引き抜いたマオは秘口から溢れる白濁液をチリ紙を取って拭った。未だ収縮しきらず鮮やかな肉色を見せる箇所を自ら弄る姿を、見てはいけないものの様に感じて視線を逸らした男だが、そんな彼の様子に気付いてマオはまた小さく笑む。
「お兄さん」
鈴の音を鳴らす。そんな言葉が似合う彼の柔らかく高い声が耳朶を打ち、視線だけを向ければ思いの外近くにその顔があった。
「お風呂、貸して下さい。ついでに一緒に入りましょ？」
手を取り引く彼に言われるまま、青年は情事の跡を刻んだシーツから降りる。
「積極的だね……」
「まさかいっぺんで満足してはります？」
気恥ずかしさに目を合わせられない青年が小さく零せば、返す言葉はまた煽状さを伴わせ。
「ファン言うてくれはって長いですし、たまにはサービスしますぇ？」
笑みを浮かべて静かに微笑んだマオの手を、男は無意識の内に強く握る。淫猥な含みを孕んだ言葉に期待してしまう。
「あぁ、せやけど」
心臓の高鳴りを聞いたかのような、愉しげな笑みのままでマオは告げる。
「キスはあきまへん。後、どっかからか隙間風入ってますやん。そこ、次来るときには直して下さいね？」
片側だけ開かれた眼は言葉と共に釘を刺す。齢僅か十とそこらの少年の掌で踊っていると知りながら、男は頷き握る手に力を込めた。
「せやったら、ひとまず汗流しましょか」
愉しげに鼻歌を交え、浴室へと消える後ろ姿を見つめながら、青年は己の幸運を噛みしめ、隙間風の在処を探そうと心に誓った。

――了――

ようこそおこしやすぅ♥

ピポーン
はいはーい
ガラッ
すんません
師匠は生憎留守してまして今日は整骨院お休みなんです
いやちゃうねん
なぁヤサカ・マオくんて自分？
そうですけど

ああ
どなたさんから聞きはったんか知りませんが
ようこそおこしやす♡
by ごんぶと
ほなちょっと準備してきますねー
ぱたぱたぱた

おっちゃんらどっから来はったん？

へえ、わざわざ遠くからありがとぉ

さて、と…

どちらさんからしましょか？

ぎしっ

え、順番決めなぁかんの？

すんませんそういう主義でやってますんで

お二人さんいっぺんやのうてお一人ずつちゃぁんとお相手するさかい

悪いけどどっちかちょお待っとってもらえます？

ほな
よろしゅう♡
こちらこそ…
マオくんて
名前で呼んで
ええか？
ふふっ♡
お好きにどうぞ～

界隈で
有名なんやで
マオくん
「京都の道場に
ええことさしてくれる
子がいてる」って
ホンマに
会えるとは
思てなかったけど

へえ
そうなんや
ガンプラで有名と
ちゃいますの？
そうそう
ガンプラな！
それも有名やで

ま
どっちも好きやし
ええですけどね

すーすー

やらしいこと好きなんや？

まだ子供なのにあかんで

おっちゃんこそわいみたいな子供にあきまへんやろ

せやなぁ

でもこんな誘うようなかっこ見せられたらなぁ…

くいっ

誘うてるつもり全然ないんやけど…

ごそごそ

なんでかおっちゃんみたいな人らによう言われますわ

ここに来はるんはそういう変態さんばっかりですけどね

ずっ

なんや
おっちゃんの
ちんちん

くす
くす

何もしてへんのに
もう大きくなっとる

ぶるんっ

こんなに
ビクビクさせて
やらしいこと
考えすぎですわ

ふ

マオくんが
やらしいから
しゃーないやろ…

きゅ…

にゅる…

にゅるっ

ちゅっ♡

いや
手馴れたもんやな
感心するわ

そこらの
姉ちゃんより
なんぼか上手いで

ホンマに？
ありがとぉ♡

褒められるの嬉しいから張り切ってやらせてもらいますね♡

おう、ほなしっかり頼むで

はいな♡

ちゅぱっ

ちゅぱっ

ホンマ上手いなぁマオくん

弱いとこよう分かっとる…

おーい

はよ交代してくれやー

ちゅるっ

ちゅるっ

やかましいわもうちょい待っとれ

じゅるっ

じゅるっ

おっちゃん
ガチガチになってはる

でもまだ
イったら
あきまへんえ？

ちゅぱっ

まだほんの
前菜なんやから…

煽るのも
上手いなぁ

いつも
そんなふうに
男と遊んでんのかい

それはご想像に
お任せします…

あ…

そこ、
あきまへんて…♡

ふふっ
こそばゆいですわ

マオくん
手悪さはもうええから…
そろそろ、なあ…？
もう我慢でけへんのです？しゃーないなぁ
ほな挿れはりますか？
頼むわ
その前に自分の方も慣らさなあかんやろ

ご心配なく
ンッ…
わいの方は準備できてるさかい…
は…ぁ
なんや自分めっちゃ慣れてるやん
おっちゃん遠慮せんでもええかこれ
ちょっとは手加減してくださいね？
ひゃっ
準備万端やないか…
ん…っ

く、ぅ…ッ

ん、あ…ッ

は、ぁ…

はぅ…
き、つぅ…

おっちゃんの、
おっきすぎやわぁ…♡

おぅ…っ

慣れてるくせに
めっちゃ
締まりええやん…

動くで
マオくんっ

アッ

アッ

あんっ♡

も…ちょっ

ゆっくりし、て

や…あ♡

あッ♡
んッ♡
ぱちゅっ♥
ええ感じになってっ
ぱちゅっ♥
きましたわぁ…っ♡
あッ♡
ぐーりぐーりあはは
ええか？ここがええんか？
おっちゃん言い方がやらしいわ
さっきから弱いとこばっか責めるなんていけずやわぁ…
ふふっもっと動いてもええよ…♡
言われんでもっ
ずぷっ
ずぷっ
あっあぁあぁん♥
マオくんっ…

なあっ…

こっちも我慢でけへんのや頼むわ…

しゃーないなぁ…手でもええですか？

よっしゃ分かったっ
出すでっマオくんっ
あ♥
ビュッ
あぁッ♥
びちゃっ
べちゃっ
はぁ…♡
はぁ…♡
ぱくっ
ぱくっ
熱ぅ…♡
ふー…っめっちゃ良かったでマオくん
ほんなら交代したるわ

はぁ…
お待たせしてすんません
ほな、こっちに…
ひゃんっ!!
ちょっ!!
おっちゃんいきなり!?
ずっと待たされとる間こんなん見せられて我慢できるかい!
それに今までハメられとってガバガバやないか
噂どおりのエロガキやな!

おうっ
すごい締めつけやっ
はうっ激し…っ
このまま中に出したるっ
あかんっ
あかんておっちゃんっ…
あっ♥
あんっ♥
あっあ♥
びゅっ
びゅっ
びゅっ
はうぅ…♥
びくっ
びくっ
びくんっ
あかん言うてるのに…
はっ
はっ

くすくす

濃いいのようけ出しはって

しょうのないお人ですなぁ

今出したとこやのに

おっちゃんのまだ固い…

続けますよね？

当たり前やろ

こっちばっかしええようにしてもろたら悪いやないか

ちゃんと今度はイかせたるわマオくん

あうっ♥

すぐぬぬっ

あっ♡
中っ
すごいですぅっ♡♡♡
あっ♡
すごいっ♡
そんなにええか？
マオくんの
可愛らしいちんちんも
勃起しとるで
ぬぽっ
ぬぽっ
ぬぽっ
ぬぽっ
お、
おっちゃんっ
そんなにしたらっ
わいっ…
んー？
なんやマオくん
イキそうか？
イッたら
ええねん
ほらっ
あっ♡
あぁんっ♡
あかんよぉっ♡

あかん言うてホンマは好きやろ？なあ？

おっちゃんにこうやってズボズボされるの好きなんやろ!?

あんっ

あんっ

あかんっ

イくっ

イきますっ

どないやマオくんっ

ぬぷっ

ぬぷっ

ぬぷっ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

…っあ

はぁ…♡

はうぅ…♡♡

マオくん

は

は

マオくんおっちゃんともっかいしよ？な？

あぅ

ぬるっ

ぬるん

マオくんっ
はっ
はっ
あぐっ
ぬるんっ
きゃうう♡♡
あっ
あ♡
そないに、
いっぺんにはあかんて…っ
にゃああんっ♡♡

あ♡
んっ♡
どん♡
あう♡
ぱんっ
あーー♡
すごいっ♡♡
はっ♡
ホンマにいっぺんに入れられとるっ…♡♡
あかんわぁっ…♡♡
ひくっ
ひくっ
はっ♡
はっ♡
マオくんの中最高やっ
おっちゃん中に出すわっ
あっ♡
ええやろ!?
はひぃ♡

マオくんっ
マオくんっ
おっちゃんも
出すでぇっ
…っぁ♡
あかん、て…
おっちゃぁん…♡
ホンマに
おっちゃんら
困った人たちですわぁ…

びくっ
びくっ
こんなにぐちゃぐちゃしはって…
そんなに良かったん…？
ふふっ嬉しいわぁ♡♡♡
お土産ありがとぉ♡
また来てくださいね

マオくん これ

ガンプラの足しにでもしてや

だって楽しませてもらいましたもん♡

ほな お気をつけて

運がよければまたお相手します♡

終

こんにちわ、ごんぶとです。
ビルドファイターズ・マオくん本です。
やっぱ可愛い子にはモブが似合いますよね！
という事でモブのおっちゃんとかお兄さんに遊んでもらいました。わあい。
マオくんの京都弁がどうしても芸奴さんみたいに聞こえて
仕方が無いのでビッチなイメージが離れなくてですね…
というか本編の初登場でヒッチハイクとかもういきなり
ビッチだったからそれは仕方が無い。
きっとおれにガンプラ以外に身体も差し出したに違いない。
マオくんは色んな男の味を知ってるに違いないという想像が
無限に広がりますね…あの子魔性すぎてあかん。

そしてまたしてもゲストを快く受けてくださった和紗さまに
心から感謝申し上げます。
というかご本人ですねこれ…ありがとうございますw

本編はひとまず完結しましたが続くでしょこれ…
可愛いマオくんにまた会えるのを楽しみにしておこう。
ガンプラ作って待機しておきます（にわか）

それでは最後までお目通しありがとうございました。
機会がありましたらまた＾＾

2014年4月　　ごんぶと

ようこそおこしやすぅ♪

2014.5.3　Ad-Hoc
adhoc@xv.lolipop.jp
http://adhoc.lolipop.jp/
印刷：サンライズ

ガンプラ以外のバトル、どないです？
製造年月日
2014年5月3日
開封後はお早めに
ご賞味ください。